

特別支援教育部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

1. 研究課題

「通常学級における個別の教育的配慮を要する児童生徒一人一人のニーズに応える教育的支援はどうあればよいか～合理的配慮について考える」

2. 研究内容

【研究内容 1】

○通常学級における学習に困難のある児童・生徒への支援、通常学級における多様な教育的ニーズのある児童・生徒の教科指導上の配慮

【研究内容 2】

○通常学級における社会性の発達の遅れやコミュニケーションに障がいがあり、主に集団での生活場面に困難のある児童・生徒への支援

【研究内容 3】

○通常学級における特別支援を要する児童・生徒の校内支援体制や関係機関との連携について

3. 研究方法

(1) 今年度の研究計画

各校のレポートを中心に南北2ブロック、3分科会に分かれて、小中学校混合のグループにより交流する。

(2) 分科会テーマ

- | | |
|-------|--|
| 第1分科会 | 「通常学級における学習に困難のある児童・生徒への支援について、通常学級における多様な教育的ニーズのある児童・生徒の教科指導上の配慮」 |
| 第2分科会 | 「通常学級における社会性の発達の遅れやコミュニケーションに障がいがあり、主に集団での生活場面に困難のある児童・生徒の支援について」 |
| 第3分科会 | 「通常学級における特別支援を要する児童生徒の校内支援体制や関係機関との連携について」 |

(3) 分科会別キーワード

- | | |
|-------|---|
| 第1分科会 | 学習指導に対する支援方法・学習準備や学習環境の整理に対する支援、学習態度に対する支援、家庭での学習に関する支援 |
| 第2分科会 | 学習や生活ルールへの支援、こだわりを持つ児童・生徒への支援、自傷、他傷行為や破壊行為をする児童・生徒の支援、保護者対応での困難さ、小学校と中学校の連携について |
| 第3分科会 | 就学指導や進路指導について、医療機関などの関係機関との連携・教育相談のもち方、コーディネーター業務（担任との連携）、校内の特別支援教育の体制 |

Ⅱ. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

5月8日	第1回	部会役員研修会 役割分担確認・研究協議会日程、担当者確認
6月6日	第2回	部会役員研修会：課題交流 当日運営に関わって、アンケート・レポート様式確定
7月28日	第3回	部会拡大役員研修会① 北ブロック江別市立第一小学校にて、研究協議会の流れ確認
7月31日	第3回	部会拡大役員研修会② 南ブロック千歳市立信濃小学校にて、研究協議会の流れ確認
8月18日	第4回	部会役員研修会 当日運営確認
9月5日	石教研課題部会研究協議会 実践レポート交流・テーマ別交流	
10月10日	第5回	部会役員研修会 役員選定・次年度の研究協議会内容の検討
1月18日	第6回	部会役員研修会 次年度研究の具体的な推進計画

(2) 部会役員研修会での研究成果

今年度は、感染症対策により参集が叶わなかった期間を経て、ようやく対面で協議することが叶い、研究のまとめの年度となった。

研究主題「通常学級における個別の教育的配慮を要する児童・生徒一人一人のニーズに応える教育的支援はどうか〜合理的配慮について考える」に基づき、先年度の2本の講演会も踏まえ、各部会員が実践してきた成果を有意義に交流できる場を設定した。

本部会は、部会員数が約260名という大人数のため、南北の2ブロックに分かれて研究協議会を準備した。第1部では、それぞれのブロックで実践レポートに基づいた交流を少人数で行い、第2部では、小テーマを設定して、当日に組み合わせた地域学校種混合のグループで、部会員のニーズと明日からの実践に役立つ討議を行えるテーマ別交流を設定した。

部会員研修会では、当日のスムーズな運営のための入念な準備と効率的な協議を行うための話し合いを行った。また、役員の循環が進んでいないことも話題となり、今後の研究推進のためにも役員を引き受けてくださる方の選考やスムーズな引継ぎについても討議した。

会場校での拡大役員研修会を含め、全6回の役員研修会で、より効率的で効果的な討議と準備ができるように工夫した研修会運営を行った。

次年度の研究の具体的な内容についても、昨年度のレポートでの話題やアンケートを基に、部会員の皆さんと支援を必要としている児童生徒の「今」、必要なテーマの設定と研究方法について、早いうちから討議してきた。

今年度、役員研修会で取り組んできた「明確で公平な役割分担」と「効率的な協議」で、課題部会研究協議会を円滑で効果的な討議の場にすることができた。次年度も、さらに働き方改革の視点と実践に役立つ協議会運営となることを念頭に、役員研修会を進めていく。

2. 課題部会協議での交流

(1) 課題部会研究での交流内容

南ブロック

【第1分科会】



① 実践・レポート交流の様子

10グループに分かれ、活発に実践交流を行った。どこの学校にも支援を要する児童生徒が多いことを知り大変なのは自分だけではないということを実感できる時間となった。主に、子どもを多面的に把握すること、ゲーム性を取り入れて子どもがやってみたくなる環境づくり、保護者との連携、日本語指導に理解のある教員について話し合われた。

② テーマ別交流の様子

学習指導・学習準備や学習環境の整理・学習態度・家庭での学習と4つのテーマに分かれ、それぞれの支援方法について交流を行った。うなずき、笑いがたえない時間となった。その様子から日々の仕事に追われ、教育について語りたいけど語れない熱い思いが伝わってきた。ICTの活用、時代も変化する中で教育活動の1つ1つの目的が本当に必要なことなのか考え直すことについて話し合われた。

③ 成果と課題

・子どもの実態に合わせて個別最適な学習を進めるための実践を交流することができた。進めるためには子どものよさを見ること、苦手意識や拒否感をもたせないよう楽しさを取り入れた課題設定をすること、自己肯定感が向上する取組の大切さ、ICT活用などについて学び合うことができた。

・通常級において複数の支援が必要な児童・生徒がいる場合、様々な連携を進めていく難しさや個別最適な学習をどのように進めていくのか課題が明らかとなった。



【第2分科会】

① 実践・レポート交流の様子

3～5名の全9グループに分かれてレポート交流を行った。主な話題は以下の通りである。

○行動や気性が荒い子は複数で対応。見通しをもたせる。周囲の子も落ち着く学習環境を整備する。

○学年やコーディネーター、SC等がチームとして共通認識をもって対応し、担任以外にも居心地のよい関係を複数築いていく。

○保護者への丁寧な情報提供と、理解や協力を得ることの重要性。

○ことばの教室や通級指導教室、医療機関等との連携が効果的。

② テーマ別交流の様子

①学習や生活ルールへの支援、②こだわりを持つ児童生徒への支援、③自傷、他傷、破壊行為をする児童生徒への支援、④保護者対応での困難さ、⑤小学校と中学校の連携について、という5つのテーマから希望するものを選択し、3～4名の全10グループに分かれて交流を行った。学校を安心して生活できる場とするための学級経営の重要性、最低限のルールを守らせることの徹底、特性とわがままの判別の難しさ、不適切な行動も自己表現の一つとして捉え、適切な方法を教える&認めることの必要性、家庭環境の背景の影響、学校以外の関係機関との連携、校内体制の整備、小中間のニーズのギャップとコーディネーターの関わりについて等が話題に挙がり、活発な話し合いが行われた。

③ 成果と課題

・地区、小学校と中学校、通常学級担当と特別支援学級担当等の違いに関係なく、様々な環境で子どもたちと向き合っている先生方が入り混じったグループが構成され、日々の実践や抱えている課題等について交流することができた。多様な実践や意見に触れることができ、大変有意義な時間となった。

・グループ数が多いため、交流し合うことのできる範囲が限られてしまったが、少人数のグループを構成することで、レポート交流、テーマ別交流ともにグループ内で内容を深めたり広げたりすることができた。

【第3分科会】

① 実践・レポート交流の様子

10グループに分かれてレポートをもとに、実践交流を行った。1～6グループでは、不登校の児童生徒の増加に伴う問題や、別室登校の有効性や、在籍変更にあたっての保護者の理解を得るための工夫や考え方などを主に交流した。一時間ごとに別室の担当者を決めて対応している学校もあれば、人員不足でできない学校もあった。また、在籍変更にあたり、チャート表を利用するなどして分かりやすく選択肢の先の将来像を伝える工夫について報告があった。

7～10グループでは、コーディネーターが関わる児童生徒が年々増加していることから、担任をしながらの業務は十分な児童観察が難しい現状があるため、それぞれの学校で工夫されていることを交流した。また、不登校の児童生徒の支援も増えており、各学校で限られた教員で行う支援の実践報告があった。

② テーマ別交流の様子

ケース会議や担任との個別ケースの相談、知能検査など、コーディネーターが関わる業務が年々増えていることから、一人体制や、担任との兼務によって必要な対応が十分できないことの難しさ、専門的な情報収集の必要性などの話題が出ていた。小学校と中学校ではコーディネーターの業務や校内的な位置付けが異なる傾向があることについての話もあった。また、高校進学、医療受診、不登校児童への対応など、今後も校内だけでなく、他機関と連携をしながらの支援が必要であることが交流された。



③ 成果と課題

- ・「コーディネーター」の複数配置が必要。一人配置の学校もある。困り感のある児童生徒が増えていることから、複数配置が望ましいという共通理解が得られた。また、コーディネーターと担任を兼任している場合、役割分担も必要であることが共有された。
- ・年々、不登校の児童生徒への支援が増えてきているが、不登校の子どもを受け入れるための別室の設置など、校内でできる支援を行っている。しかし、支援を行うための教員が不足している状況があり、改善が望まれる。
- ・特別支援学級、特別支援学校への進路指導の際は、保護者や本人に実際に見学してもらうことも有効である。
- ・小学校と中学校でのコーディネーター業務の位置付けが異なりがちなことから、小・中の連携を十分に行い、保護者の違和感を軽減することが重要である。

北ブロック

【第1分科会】

① 実践・レポート交流の様子

- ・小規模校においては、人間関係ができている分、支援学級の転籍は難しい。
- ・支援級に進めることの困難さを感じている。母親が了解しても、父や祖父母の反対で断念している。
→教育委員会など第三者に、支援級で学ぶメリットも含めながら説明して貰うことが有効。
- ・やる気をもたせるために→褒めて伸ばす。できることの喜びを体感させる。教師との信頼関係の構築。
- ・読み書きの支援→家庭学習の協力を保護者へ依頼。ビジョントレーニングが有効。(点つなぎ、迷路など)
- ・合理的配慮について(対象の児童生徒の安心)→書けない「書かなくてもいいよ」タブレットで写真を撮る。
→踊れない「踊らなくてもいいよ」見て学習させる。
- ・授業に集中できず何度注意されても本を読んでいる。→自己肯定感を高められるような声かけが必要。

② テーマ別交流の様子

○指示は短く、3つ以内。計算はルーティンにすると理解しやすい。視覚優位の児童生徒が多い為、図などを提示する方がよい。理科の観察ではタブレットで写真を撮って写させるなど。万人受けする支援はない。個に合

わせる必要がある。

- 「対話」や「ICT活用」など、新しい事柄が増え、教師も子どもたちもやらなければならないことが増えていく。その中では、「できなかったこと」が多く、子どもたちの自己肯定感が失われていく。
- 環境によって、子どもは変わる。構造化の考えを生かしたファイル整理が有効。
- 暴れる、離席、物を壊そうとする、廊下に出て大声を出す、全てはかまって欲しいという気持ちから来る行動であり、スキンシップを求めている児童が多い。
- プリント→ノートと段階を経て、習慣化させるような取組が必要。小から中へと繋げられるよう家庭学習の仕方についても連携が必要。

③ 成果と課題

学習意欲を向上させるための手段について、実践に結びつくような多くのアイデアが出された。他の話題についても実践を交流することにより、個々が抱える悩みを解決する糸口を見つけられた様子であった。

最も多く話題になったことは支援を要する児童生徒の適切な学びの場についてであった。通常学級に在籍する支援を要する生徒は年々増加傾向にはあるが、本人及び保護者の納得を得られず転籍を進められずにいるケースも多いということであり、今後の大きな課題とされる。



【第2分科会】

① 実践・レポート交流の様子

「通常学級における社会性の発達の遅れやコミュニケーションに障がいがあり、主に集団での生活場面に困難のある児童生徒への支援」を討議の柱に3グループに分かれて、レポート発表を基にした交流を行った。日々の悩みや実践報告があり、少人数の分科会ではあったが活発な意見交流が行われた。その中の主なキーワードと内容は以下のとおりである。

- 情報共有…コミュニケーション力の向上を目指すには作業のある活動を取り入れると効果的
- 生活場面に困難のある児童生徒への支援
 - ・不登校、生活リズムの乱れや学習不安等から不登校傾向の場合は、保護者支援も必要。デイサービスの活用や居場所の確保、取り出し学習などに取り組むが、教員不足で対応に苦慮する現状。
 - ・知的障害のある児童生徒への学習支援として、手帳を活用している学校の実践紹介。
- 合理的配慮…暴力的であったり、やりたくないことから逃げたりする傾向にある場合、できたという成功体験（やらせてできた）から自信をもたせることこそが最大の合理的配慮。
- 保護者との連携…課題が伝わりにくい場合こそ、集団の中での実態を見てもらい、理解・支援を促す必要がある。

② テーマ別交流の様子

討議の柱として5つ準備したテーマの中から個々に選択してもらい、小グループを編成し、交流を行った。参加者が選択したテーマは「学習や生活ルールへの支援」、「こだわりをもつ児童生徒への支援」の2点。グループ討議の中で「保護者対応の困難さ」についても話題として取り上げることとした。両グループとも話が尽きないほど、とても有意義で活発な交流時間となった。

- 学習面への支援…欠席した時間のノートは、貼る。前時の振り返りは短く。リモート対応やタブレット学習。細目に保護者連絡・連携。取り出し学習や放課後学習など学校としての取組紹介。
- 生活面への支援…学校全体での情報共有。Coとの連携。複数での対応（組織的対応）。全校での生活規律の統一。タイマーやブザーの活用。
- こだわり…対応するのが大人である場合は“こだわり”を認めては、不登校や登校渋りも“好き”や“強み”を生かして登校支援へとつなげていける。連携の大切さ。
- 保護者対応…連絡帳の活用。保護者によっては、連絡帳+電話で対応。どんなこともしっかりと説明できるよう理由付けを忘れない。よいことを多く伝えるよう心掛ける。保護者だけではなく児童生徒自身にも成長や課題を伝

えることも必要。実態を見てもらうことも必要。時には、管理職の力を借りて、保護者対応をしていく。

③ 成果と課題

少人数の分科会であったが、終了時刻を過ぎても話題が尽きず、活発な意見交流ができた。悩み解決のためのアイデアを出し合い、興味深い実践の交流が行われ、有意義な時間となった。一方、不登校や不登校傾向にある児童生徒、学習遅延や学力不振児童生徒やその保護者対応に苦慮している学校、先生方が年々増えていることが明るみになった。SC、SSW、Co、医療や専門機関と連携し、組織的に対応していくことが今後ますます必要である。

【第3分科会】

① 実践・レポート交流の様子

テーマである通常学級における特別支援を要する児童生徒の校内支援体制や関係機関との連携について小グループに分かれ、レポート交流を行った。レポートの主な話題及び課題は以下に記載した通りである。

①通常学級で学習できない生徒の対応として、支援員が対応。②通常学級における支援を要する生徒の増加について、人員配置の課題。支援が必要な生徒と不登校支援を分けてしまうことが課題。③不登校と校内支援の対応や特別支援学級へ通級と転籍の流れと合理的配慮事項に関する引継ぎの在り方について。④小中一貫校の適応指導教室（不登校、行き渋り）の担当者の充実についての課題。⑤外国籍児童生徒の増加に伴い、言葉の壁に対して対応について。⑥校内支援体制や関係機関連携及び、SCやSSWについて。⑦校内に通級指導教室が設置されていない場合の支援体制について。⑧不登校対応として自学室を設置し、学級担任外や支援員が登校につなげているケースについて。

② テーマ別交流の様子

「就学指導や進路指導について」のテーマでは、保護者のニーズが多様化している、自閉情緒障がいの生徒の進路や普通高校への進学は中学校入学時から方向性を見立てて決める、高等支援学校の選択の必要性和自分で学習できる力をもっている生徒の通信制高校の選択について話された。「医療機関・関係機関について」では、地域における発達検査実施者の不足と地域による支援事業所数による課題、福祉事業所の利用、地域の支援センター等での実施検査内容の制限、校内体制と外部連携に対する課題について話された。「教育相談について」では、不登校生徒に対して校務分掌が教育相談を実施、進路の方向性と支援学級への通級と療育手帳等の取得について交流した。

「コーディネーター業務」については、校内体制や連携の整備、不登校生徒に対応する教室と対応者の整備（支援員の活用）、通級指導教室の設置有無による影響について話された。「校内体制」については、情報共有の場として定期的にサポート委員会を開催、コーディネーター業務課題として個別の教育支援計画と個別の指導計画の評価と活用、児童生徒の学習環境や個別的な対応の検討、専門的な機関連携の促しと家庭支援に対する個別的な配慮事項と方法に対応することができるスキルの向上について話された。

③ 成果と課題

校内支援体制の整備や地域の人的資源の活用方法、医療機関または外部の関係機関との連携の在り方について教職員の研修と実践課題を交流した。不登校や発達の課題など、個のニーズが多様化しており、日常的に様々なケースへの対応、校内外との連携業務による負担や家庭連携への対応としてスキルの向上が求められていることなど課題解決に向けた意見及び実践の交流を深めることができた。

Ⅲ. 部会研究の成果と課題

どの分科会、そして小グループでも活発な討議が行われ、新たな支援方法を交流し、共通に抱える課題についての協議を深めるなど、有意義な時間となった。今後は次年度の研究を見据え、「個」に対する支援、「集団」に対する支援、「校内及び関係機関」の連携を中心に部会員の研修を深められるテーマ設定を検討していく必要を感じている。

次年度も引き続き、部会員の日々の実践に還元できるテーマと講演会等の学びの場を設定していく。

(文責 太田 亜弥)